

夜行巡査

泉鏡花作

一

「かう爺様、お前何處だ。」と職人體の壮佼は、  
其傍なる車夫の老人に向ひて問懸けたり。車夫の老  
人は年紀すでに五十を越えて、六十にも間はあらし  
と思はる。餓ゑてや弱々しき聲の然も寒さにをの  
きつゝ、  
「何卒眞平御免なすつて、向後屹と氣を着けます  
る。へい／＼」

と、どぎまぎして慌て居れり。

「爺様慌てなさんな。こう己や巡査ぢやねえぜ。

え、おい、可哀相に餘程面食つたと見える、全體お  
前、氣が小さ過ぎらあ。何の縛らうとは謂やしめえ  
し、彼様に怯氣々々しねえでものことさ。俺片一方  
で聞いて、せえ少癩癩に障つて堪へられなかつたよ。  
え、爺様、聞きやおめえの扮装が悪いとつて咎めた  
様だつてが、それにしちやあ咎め様が激しいや、他  
にお前何ぞ仕損ひでもしなすつたのか、えゝ、爺

様。  
「

問はれて老車夫は吐息をつき、

「へい、誠に吃驚いたしました。 巡査様に咎められましたのは、親仁今が最初で、はい、もう何うなりますることやらと、人心地もござりませなんだ。いやもうから意氣地がござりません代にや、決して後暗いことはいたしません。唯今とても別に不調法にあつた譯ではござりませんが、股引きが破れまして、膝から下が露出でござりますので、見苦しいと、こんなにおつしやります、へい、御規則も心得ないではござりませんが、つい届きませんもんで、へい、唐突にこら！ ツて喚かれましたのに 驚きまして、未だに胸がどき／＼いたしまする。」

壯伎は頻に頷けり。

「むゝ、左様だろう。氣の小さい維新前の者は得て巡的を恐がる奴よ。何だ、高がこれ股引がねえからとつて、仰山に咎立てをするにやあ當らねえ。主の抱車ちやあるめえし、ふむ、餘計なおせつかいよ、喃爺様、向うから謂はねえたつて、此寒いのに股引

は此方で穿きてえや、其處一が銘々の内證で穿かねえから、穿けねえのだ。何も穿かねえというんじやねえ。然もお提灯より見ッこのねえ闇夜だらうぢやねえか、風俗も絲瓜もあるもんか。汝が商賣で寒い思をするからたつて、何も人民にあたるにやあ及ばねえ。ん！寒鴉め。彼様奴も滅多にやねえよ、往來の少ない處なら、晝だつてひよぐる位は大目に見てくれらあ、業腹一な。我あ別に人の禪襦で相撲を取るにもあたらねえが、これが若いものでもあることか、可哀相によぼ／＼の爺様だ。かう、腹あ立てめえよ、眞個さ、此状で腕車を曳くなあ、よく／＼のことだと思いいねえ。チヨツ、べら棒め、洋刀がなけりや袋叩にして遣らうものを、威張るのも可い加減にして置けえ。へむ、お堀端あ此方人等のお成筋だぞ、罷間違やあ胴上げして鴨のあしらいにしてやらあ。

口を極めて既に立去りたる巡查を罵り、満腔の熱氣を吐きつゝ、思はず腕を擦りしが、四谷組合と記したる煤け提灯の蠟燭を今繼ぎ足して、力無げに梶棒を取上ぐる老車夫の風采を見て、壯佼は打ち惰るゝ

までに哀を催し、「而して爺様稼人はお前ばかりか、孫子はねえのかい」  
優しく謂はれて、老車夫は涙ぐみぬ。

「へい、難有う存じます、いやも幸と孝行な忤が一人居りまして、能う稼いでくれています、お前様な晩にや行火を抱いて寝て居られる勿體ない身分でござりましたが、忤はな、お前様、此秋兵隊に取られましたので、後には嫁と孫が二人皆な快う世話をしてくれませんが、何分活計が立兼ねますので、蛙の子は蛙になる、親仁も舊は此家業をいたして居りましたから、年記》は取つても些少は呼吸がわかりますので、忤の腕車を斯うやつて曳きますが、何が、達者で、綺麗で、安いといふ、三拍子も揃つたのが競争をいたしますのに、私の様な腕車には、それこそお茶人か、餘程後生の善いお客でなければ、とても乗つてはくれませんで、稼ぐに追着く貧乏なしとはいひますが、何うしていくら稼いでも其日を越すことが出来悪うござりますから、自然装なんぞも構ふことは出来ませんので、つい、巡査様に、はい、お手数を懸けるやうにもなります。」

最長々しき繰言をまだるしとも思はで聞きたる壯  
伎は一方ならず心を動かし、

「爺様、否たあ謂われねえ、むゝ、道理だ。聞き  
や一人息子が兵隊になつてるといふぢやねえか、大  
方戦争にも出るんだらう、そんなことなら黙つて居  
ないで、どし／＼言籠めて隙あ潰さした埋合せに、  
酒代でもふんだくつてやれば可いに。」

「えゝ、滅相な、しかし申譯のためばかりに、其  
事も申しましたなれど、一向お肯入がござりません  
ので。」

「わかも  
壯伎はます／＼憤り一人憐みて、  
「何という木人參だらう、因業な寒鴉め。トいつ  
た處で仕方もないかい。時に爺様、手間は取らさね  
えから其處一まで一處に歩びねえ。股火鉢で五合と  
やらかそう。ナニ遠慮しなさんな、些相談もあるん  
だからよ。はて、可いわな。お前稼業にも似合ねえ。  
馬鹿め、こんな爺様を掴めえて、劍突も凄まじいや、  
何だと思つて居やがんでえ、こう指一本でも指して  
見る、今ぢや己が後見だ」

憤慨ふんがいと、輕侮けいぶと、怨恨えんこんとを満みたしたる、視線しせんの赴おもむ  
く處ところ、麹町かうぢまぢ一番町ばんぢやう 英國えいこく公使館こうしきわんの土塀どべいのあたりを、  
柳やなぎの木立こだちちに隠見いんけんして、角燈かくとうあり、南みなみをさして行く。  
其光そのひかりは暗夜あんやに怪獸くわいじうの眼まなこの如ごとし。

公使館のあたりを行くその怪獣は八田義延という  
 巡查なり。渠は明治二十七年十二月十日の午後零  
 時をもつて某町の交番を發し、一時間交替の巡回の  
 途に就けるなりき。

其歩行や、この巡查には一定の法則ありて存する  
 が如く、晩からず、早からず、着々歩を進めて路を  
 行くに、身體は屹として立ちて左右に寸毫も傾かず、  
 決然自若たる態度には一種犯すべからざる威嚴を備  
 へつ。

制帽の庇の下に物凄く潜める眼光は、機敏と鋭利  
 と嚴酷とを混じたる、異様の光に輝けり。

渠は左右の物を見、上下のものを視むる時、更に  
 其顔を動かし、首を掉ることをせざれども、瞳は自  
 在に回轉して、随意に其用を辨ずるなり。

然れば路すがらの事々物々、譬へばお堀端の芝生  
 の一面に白く仄見ゆるに、幾條の蛇の這へるが如き  
 人の踏みしだきたる痕を印せること、英國公使館館  
 の二階なる硝子窓の一面に赤黒き燈火の影の射せる  
 こと、其門前なる二柱の瓦斯燈の昨夜よりも少しく

暗きこと、往來の眞中に脱捨てたる草鞋の片足の、霜に凍て附きて堅くなりたること、路傍にすく／＼と立併べる枯柳の、一陣の北風に颯と音して一齊に南に靡くこと、遙か彼方にぬつくと立てる電燈局の煙筒より一縷の煙の立騰ること等、凡そ這般の些細なる事柄と雖も一として件の巡査の視線以外に免るゝことを得ざりしなり。

然も渠は交番を出で、路に一個の老車夫を叱責し、而して後此處に來れるまで、たゞに一回も背後を振り返りしことあらず。

渠は前途に向ひて着眼の鋭く、細かに、厳しきほど、背後には全く放心せるものゝ如し。如何となれば背後は既に一旦我が眼に檢察して、異状なしと認めてこれを放免したるものなればなり。

兇徒あり、白刃を揮ひて背後より渠を刺さむか、巡査は其呼吸の根の留まらむまでは、背後に人あるといふことに、思ひ到ることはなかるべし。他なし、渠は己が眼の觀察の一度達したる處には、譬ひ藕絲の孔中と雖も一點の懸念をだに遺し置かざるを信ず



るに因よれり。

故ゆゑに渠かれは泰然たいぜんと威嚴ゐげんを存ぞんして、他意たいていなく、懸念けねんなく、悠々いゆういゆうとして唯前途ただぜんとのみを志こころみすを得うるなりけり。

其靴そのくつは霜しものいと夜深よふかきに、空谷くうこくを鳴ならして遠とほく跽音きやうおんを送りつゝ、行く／＼一番町ばんちやうの曲角まがりかどの良やゝ此方こなたまで進すすみける時とき、右側みぎがはの唯とある冠木門かぶきもんの下したに踞うづくまれる物體ぶつたいありて、我が跽音あしおとに蠢うごめめけるを、例れいの眼まなこにて屹きと見みたり。

八田巡査はつたじゆんさは屹きつと見るに、こは最いと竄々やつ／＼しき婦人をんななりき。

一個ひとりの幼兒をさなこを抱いだきたるが、夜深よふけの目無ひとめきに心こころを許ゆるしけむ、帶おびを解とききて其幼兒そのをさなこを膚はだに引ひ緊きめ、着きたる檻褸らんぬの綿入わたいれを衾ふすまとなして、少すこしにても多量たりにやうの暖だんを與あたへむとせる、母ははの心こころはいかなるべき。よしや其母子そのおやこに一錢せんの恵めぐみを垂たれずとも、誰たれか憐あはれと思おもはざらむ。

然しかるに巡査じゆんさは二つ三つ婦人をんなの枕頭まくらもとに足踏あしぶみして、

「おいこら、起きんか、起きんか。」  
と沈しづみたる、然さも力を籠こめたる聲こゑにて謂いへり。

婦人は慌しく蹶起きて、急に居住ひを繕ひながら、  
「はい、」と答ふる齒の音も合はず、其まゝ土  
に頭を埋めぬ。

「はい、」と答ふる齒の音も合はず、其まゝ土に頭を埋めぬ。

「はい、」と答ふる齒の音も合はず、其まゝ土に頭を埋めぬ。

「はい、」と答ふる齒の音も合はず、其まゝ土に頭を埋めぬ。

「はい、」と答ふる齒の音も合はず、其まゝ土に頭を埋めぬ。

「はい、」と答ふる齒の音も合はず、其まゝ土に頭を埋めぬ。

「はい、」と答ふる齒の音も合はず、其まゝ土に頭を埋めぬ。

「はい、」と答ふる齒の音も合はず、其まゝ土に頭を埋めぬ。

身を震はせ、鞠の如くに竦みつゝ、

「堪りません、もし旦那、何卒、後生でござい  
す。少時此處にお置き遊ばして下さい。此寒さ  
にお堀端の吹曝へ出ましては、こ、この子が可哀相  
でございませぬ。種々災難に逢ひまして、俄かの物貰  
で勝手は分りませぬ……」といひかけて婦  
人は咽びぬ。

これを此軒の主人に請はゞ、其諾否未だ計り難し。  
然るに巡查は肯入れざりき。

「不可、我が一旦不可といつたら何といつても不  
可なのだ。譬ひき様が、観音様の化身でも、寝ちや  
ならない、こら、行けといふに。」

「伯父様お危うございますよ。」  
 半藏門の方より来りて、今や堀端に曲らむとする  
 時、一個の年紀少き美人は其同伴なる老人の蹣跚た  
 る酔歩に向ひて注意せり。渠は編物の手袋を嵌めた  
 る左の手にぶら提灯を携へたり。

片手は老人を導きつゝ。

伯父様と謂はれたる老人は、ぐらつく足を踏占め  
 ながら、

「なに、大丈夫だ。あれんばかりの酒にたべ酔つ  
 て堪るものかい。時にもう何時だらう。」

夜は更けたり。天色沈々として風騒がず。見渡す  
 お堀端の往來は、三宅坂にて一度盡き、更に一帯の  
 樹立と相連る煉瓦屋にて東京の其局部を限れる、こ  
 の小天地寂として、星のみ冷かに冴え渡れり。美人  
 は人欲しげに振り返りぬ。百歩を隔て、黒影あり、靴  
 を鳴して徐に来る。

「あら、巡査さんが来ましたよ。」

伯父なる人は顧みて角燈の影を認むるより、直ちに不快なる音調を帯び、

「巡査が何うした、お前何だか、嬉しさうだな。」  
と女の顔を瞻れる、一眼盲ひて片眼鏡し。女はギツクリとしたる様なり。

「ひどく寂しうございますから、もう一時前でも  
ございませうか。」

「うむ、そんなものかも知れない、ちつとも腕車  
が見えんからな。」

「ようございますわね、もう近いんですもの。」  
良無言にて歩を運びぬ。酔へる足は抄取らで、靴  
音は早や近づきつ。老人は聲高に、

「お香、今夜の婚禮は何うだつた。」と少しく  
笑を含みて問ひぬ。

女は軽くうけて、

「大層お見事でした。」

「いや、お見事ばかりぢやあない、お前は彼を見て何と思つた。」

女は老人の顔を見たり。

「何ですか。」

「嘘、羨しかつたらうの。」といふ聲は嘲る如し。

女は答へざりき。渠はこの一冷語のために太く苦痛を感じたる状見えつ。

老人は然こそあらめと思へる見得にて、

「何うだ、羨しかつたらう。おい、お香、己が今夜彼家の婚禮の席へお前を連れて行つた趣意を知つるか。ナニ、はいだ。はいぢやない。其趣意を知つてるかよ。」

女は黙しぬ。首を低れぬ。老夫はます／＼高調子。

「解るまい、こりや恐らく解るまいで。何も儀式を見習はせようためでもなし、別に御馳走を喰はせたいと思ひもせずさ。たゞ羨しがらせて、情なく思はせて、お前が心に泣いて居る、其顔を見たいばかりよ。はゝゝ。」

口氣酒気を吐きて面をも向くべからず、女は悄然

として横に背けり。老夫は其肩に手を懸けて、  
「何うだお香、あの縁女は美しいの、さすがは一  
生の大禮だ。あのまた白と紅との三枚襲で、ト羞し  
さうに坐つた恰好といふものは、ありや婦人が二度  
とないお晴だな。縁女もさ、美しいは美しいが、お  
前にや九目だ。婿も立派な男だが、あの巡査にや一  
段劣る。もしこれがお前と巡査とであつて見る。嘸  
目の覺むることだらう。喃、お香、過日巡査がお前  
をくれると申込んで来た時に、吾さへアイと合點す  
りや、あべこべに人を羨ましがらせて遣られる處よ。  
然もお前が（生命かけても）といふ男だもの、どん  
なにおめでたかつたかも知れやアしない。しかし何  
うもそれ隨意にならないのが浮世つてな、よくした  
ものさ。我といふ邪魔者が居つて、小氣味よく斷つ  
た。彼奴も飛んだ恥を搔いたな。はじめから出来る  
相談か、出来ないことか、見當をつけて懸ればよい  
のに、何も、八田も目先の見えない奴だ。馬鹿巡  
査！」

「あれ伯父様。」

と聲ふるへて、後の巡査に聞えやせんと、心を置

きて振返ふりかへれる、眼まなこに映えいずる其人そのひとは、  
・ ・ ・ ・ ・ 夜目よめ

にもいかで見紛みまがふべき。  
「おや！」 と一言我ひとことわれし知らず、口くちよりもれて愕然がくぜん  
たり。

八田巡査はつたじゆんさは一注ちゆうの電氣でんきに感かんぜし如ごとくなりき。



四

老人は咄嗟の間に演ぜられたる、このキツカケにも心着かや、更に氣に懸くる様子も無く、

「喃、お香、嘸吾がことを無慈悲な奴と怨んで居よう。吾やお前に怨まれるのが本望だ。いくらでも怨んでくれ。何うせ、吾もかう因業ぢや、良い死様もしやあしまいが、何、そりや固より覺悟の前だ。」

眞顔になりて謂ふ風情、酒の業とも思はれざりき。

女はやう／＼口を開き、

「伯父様、貴下まあ往來で、何をおつしやるのでございます。早く歸らうぢやございませんか。」

と老夫の袂を曳動かし急ぎ巡査を避けむとするは、聞くに堪へざる伯父の言を渠の耳に入れじとなるを、伯父は少しも頓着せで、平氣に、寧ろ聞えよがしに、

「彼もさ、巡査だから、我が承知しなかつたと思はれると、何か身分のいゝ官員か、金満でも擇んで居て、月給八圓におぞ毛をふるつた様だが、そんな賤しい了簡ぢやない。お前の嫌な、一緒になると生血を吸はれる様な人間でな、譬へば癩病坊だとか、

高利貸だとか、再犯の盗人とてもいふ様な者だつたら、吾は喜んで、くれて遣るのだ。乞食でゞもあつて見る、其こそ吾が乞食をして吾の財産を皆な其奴に譲つて、夫婦にしてやる。え、お香、而してお前の苦しむのを見て樂むさ。けれども彼の巡査はお前が心からすいてた男だらう。あれと添はれなけりや生きてる効がないとまでに執心の男だ。其處を吾がちゃんと心得てるから、きれいさつぱりと斷つた。何と慾の無いもんぢやあるまいか。其處で一旦吾が斷つた上は何でもあきらめてくれなければならなないと、普通の人間ならいふ處だが、吾がのは然うぢやない。伯父さんが不可とおつしやつたから、まあ私も仕方がないと、お前にわけもなく斷念めて貰つた日にやあ、吾が志も水の泡さ、形なしになる。處で、戀といふものは、そんな淺薄なもんぢやあない。何でも剛膽な奴が危険な目に逢へば逢ふほど、一層剛膽になる様で、何か知ら邪魔が入れば、なほさら戀しうなるものでな、とても思切れないものだといふことを知つてゐるから、こゝで愉快的のだ。何うだい、お前は思ひ切れるかい、うむ、お香、今ぢやもう彼の男を忘れたか。」

をんな  
女は良少時黙したるが、

「い……い……え。」ときれ／＼に答へたり。

老夫は心地好げに高く笑ひ、

「むゝ、道理だ。さうやすつばくあきらめられる様では、吾が因業も價値がねえわい。これ、後生だからあきらめてくれるな。まだ／＼足りない、もつと其巡查を慕うて貰ひたいものだ。」

をんな  
女は堪へかねて顔を振上げ、

「伯父様、何がお氣に入りませんで、そんな情ないことをおつしやいます、私は、……」と聲を飲む。

老夫は空嘯き、

「なんだ、何がお氣に入りませんか？ 謂ふな、勿體ない。何だつてまた恐らくお前ほど吾が氣に入つたものはあるまい。第一容色は可し、氣立は可し、優しくはある、することなすこと、お前のことゝいつたら飯のくひ様まで氣に入るて。しかしそんなこととで何、巡查を何うするの、斯うするのといふ理窟はない。譬お前が何かの折に、我の生命を助けてく

れてさ、生命の親と思へばとても、決して巡査にやあ遣らないのだ。お前が憎い女なら吾もなに、邪魔をしゃあしねえが、可愛いから、あゝしたもものさ。氣に入るのに入らないのと、そんなこたあ言つてくれるな。」

女は少し屹となり、

「それでは貴下、あのお方に何ぞお悪いことでもございますの。」

恚言ひ懸けて振り返りぬ。巡査は此時囁く聲をも聞くべき距離に着々として歩し居れり。

老夫は頭を打掉りて、

「う、んや、吾や彼奴も大好き。八圓を大事にかけて、世の中に巡査ほどのものはないと済まして居るのが妙だ。あまり職掌を重んじて、苛酷だ、思遣りがなさすぎると、評判の悪いのにも頓着なく、すべ一本でも見免さない、アノ邪慳非道な處が、馬鹿に吾は氣に入つてる。まづ八圓の價値はあるな。八圓ぢや高くない、禄盗人とはいはれない、まことに立派な八圓様だ。」

をんな  
女は堪らず顧みて、小腰を屈め、片手をあげてソ  
と巡查を拝みぬ。いかにお香はこの振舞を伯父に認  
められじとは勉めけむ。瞬間にまた頭を返して、八  
田が何等の舉動を以て我に答へしやを知らざりき。

「えゝと、八圓様に不足はないが、何うしてもお前を遣うことは出来ないのだ。それも彼奴が浮氣もので、ちよいと色に迷つたばかり、お嫌ならよしなさい、他所を聞いて見ますといふ、お手輕な處だと、吾も承知をしたかも知れんが、何うして己が探つて見ると、義延（巡查の名）といふ男はそんな男と男が違ふ。何でも思込んだら何うしても忘れることの出来ない質で、矢張お前と同一様に、自殺でもしたといふ風だ。こゝで愉快いで、はゝゝゝはゝゝ。」  
と冷笑へり。

女は聲をふるはして、

「そんなら伯父様、まあ何うすりやいゝのでござ  
います。」と思詰めたる體にて問ひぬ。

伯父は事もなげに、

「何うしても不可いのだ。何んなにしても不可い  
のだ。とても駄目だ、何にもいふな、譬ひ何うして  
も肯きやあしないから、お香、まあ、然う思つてく  
れ。」

女はわつと泣出しぬ。渠は途中なることをも忘れ  
たるなり。

伯父は少しも意に介せず、

「これ、一生のうちに唯一度いはうと思つて、今  
までお前にも誰にもほのめかしたことも無いが、次  
手だから謂つて聞かす。可いか、亡くなつたお前の  
母様はな。」

母といふ名を聞くや否や女は俄に聞耳立てゝ、

「え、母様が。」

「むゝ、亡くなつた、お前の母様には、吾が、す  
つかり惚れて居たのだ。」

「あら、まあ、伯父様。」

「うんや、驚くこたあない、また疑ふにも及ばな  
い。其を、其母様を、お前の父様に奪られたのだ。  
な、解つたか。勿論お前の母様は、吾が何だといふ  
ことも知らず、弟もやつぱり知らない。吾もまた、  
口へ出したことはないが、心では、心では、實に吾  
やもう、お香、お前は其の思遣があるだらう。巡查  
といふものを知つてるから。婚禮の席に連なつた時  
や、明暮其なかの好いのを見て居た吾は、えゝ、こ

れ、何んな気がしたとお前は思ふ。―

といふ聲濁りて、痘痕の充てる頬骨高き老顔の酒  
氣を帯ひたるに、一眼の盲ひたるが最も凄きもの  
となりて、拉ぐばかり力を籠めて、お香の肩を掴み  
動かし、

「未だに忘れない。何うしても其残念さが消え失  
せない。其為に吾はもう総ての事業を打棄てた。名  
譽も棄てた。家も棄てた。つまりお前の母親が、己  
の生涯の幸福と、希望とを皆奪つたものだ。吾はも  
う世の中に生きてる望はなくなつたが、唯何とぞし  
てしかへしがしたかつた、トいつて寢刃を合せるぢ  
やあ無い、戀に失望したものゝ其苦痛といふものは、  
凡そ、何の位であるといふことを、思知らせたいば  
つかりに、要らざる生命をながらへたが、慕ひ合つ  
て望が合つた、お前の両親に對しては、何うしても  
其味を知らせよう手段がなかつた。もうちつと長生  
をして居りや、其内には吾が仕方を考へて思知らせ  
てやらうものを、不幸だが、幸だが、二人ともなく  
なつて、残つたのはお前ばかり。親身といつて他に  
はないから、其處でおいらが引取つて、これだけの  
女にしたのも、三代崇る執念で、親のかはりに、な



あ、お香、其様に思知らせたさ。幸ひ八田といふ意中人が、お前の胸に出来たから、吾も望が遂げられるんだ。さ、斯ういふ因縁があるんだから、譬ひ世界の金満に己をしてくれるといつたつて、とても謂ふこたあ肯かれない。覺悟しろ！ 所詮駄目だ。や、此奴、耳に蓋をして居るな。」

眼に一杯の涙を湛へて、お香はわな／＼ふるへながら、兩袖を耳にあてゝ、せめて死刑の宣告を聞くまじと勤めたるを、老夫は残酷にも引放ちて、

「あれ！」と背くる耳に口、「何うだ、解つたか。何でも、少しでもお前が失望の苦痛を餘計に思知る様にする。其内巡査のことをちつとでも忘れると、それ今夜のやうに人の婚禮を見せびらかしたり、氣の悪くなる談話をしたり、あらゆることをして苛めてやる。」

「あれ、伯父様、もう私は、もう、ど、どうぞ堪忍して下さいませ。お放しなすつて、え、何うせうねえ。」

とおぼえず、聲を放ちたり。

少距離を隔て、巡行せる八田巡査は思はず一足前に進みぬ。渠は其處を通過ぎむと思ひしならむ。さりながら得進まざりき。渠は立留りて、しばらくして、たじ／＼と後に退りぬ。巡査は此處を避けむとせしなり。されども渠は退かざりき。暫次の間八田巡査は、木像の如く突立ちぬ。

更に冷然として一定の足並を以て肅々と歩出せり。あゝ、戀は命なり。間接に我をして死せしめむとする老人の談話を聞くことの、いかに巡査には絶痛なりしよ。一度歩を急にせむか、八田は疾に渠等を通越し得たりしならむ、或は故らに歩を緩うせむか、眼界の外に渠等を送遣し得たりしならむ。然れども渠は其職掌を堅守するため、自家が確定せし平時に於ける一式の法則あり。交番を出で、幾曲の道を巡り、再び駐在所に歸るまで、歩數約三萬八千九百六十二と。情のために道を迂回し、或は疾走し、緩歩し、立停するは、職務に盡すべき責任に對して、渠が屑とせざりし處なり。

六

老人はなほ女の耳を捉へて放たず、負はれ懸るが如くにして歩行きながら、

「お香、斯うは謂ふものゝな、吾はお前が憎かない、死んだ母親にそつくりで可愛くつてならないのだ。憎い奴なら何も吾が仕返をする價値は無いのよ。だからな、食ふことも衣ることも、何でもお前の好きな通り、吾や衣なくてもお前には衣せる。我まゝ一杯さして遣るが、唯あればかりは何なにしても許さんのだから然う思へ。吾もゝう取る年だし、死んだあとでと思ふであらうが、然ううまくはさせやあしない、吾が死ぬ時は其様も一所だ。」

恐しき聲を以て老人が語れる其最後の言を聞くと齊しく、お香は最早忍びかねむ、力を極めて老人が押へたる肩を振放し、ばた／＼と駈出して、あはやと見る間に堀端の土手へひたりと飛降りたり。コ八身を投ぐる！と老人は狼狽へて、引戻さんと飛行きしが、酔眼に足場をあやまり、身を横ざまに霜を、迂りて、水にざんぶと落ち込みたり。

此時疾く救護のために一躍して馳來れる、八田巡查を見るよりも、

「義さん。」と呼吸せはしく、お香は一聲呼懸けて、巡查の胸に額を埋め我をも人も忘れし如く、犇とばかりに縋り着きぬ。鳶を其身に絡めたるまゝ、枯木は冷然として答へもなさず、堤防の上に衝と立ちて、角燈片手に振翳し、水を屹と瞰下したる、時に寒冷謂ふべからず、見渡す限り霜白く墨より黒き水面に烈しき泡の吹出づるは老夫の沈める處と覺しく、薄氷は龜裂し居れり。

八田巡查はこれを見て、躊躇するもの一秒時、手なる角燈を差置きつ、唯見れば一枝の花簪の、徽章の如く我胸に懸れるが、ゆらぐばかりに動悸烈しき、お香の胸とおのが胸とは、ひたと合ひてぞ放れがたき。両手を靜にふり拂ひて、

「お退き。」

「え、何うするの。」

とお香は下より巡查の顔を見上げたり。

「助けて遣る。」

「伯父さんを？」

「伯父でなくつて誰が落ちた。」

「でも、貴下。」

「巡査は儼然として、

「職務だ。」

「だつて貴下。」

「巡査は冷かに、職務だ。」

「お香は俄に心着き、また更に蒼くなりて、

「おゝ、そしてまあ貴下、貴下はちつとも泳を

知らないぢやありませんか。」

「職掌だ。」

「それだつて。」

「不可ん、駄目だもう、僕も殺したいほどの老爺

だが、職務だ！ 断念ろ。」

と突遣る手に喰附くばかり、

「不可ませんよう、不可ませんよう。あれ、誰ぞ

来て下さいな。助けて、助けて。」と呼び立つれ

ど、土堀石垣寂として、前後十町に行人絶えたり。

八田巡査は、聲を上げまし、

「放さんか！」

決然として振拂へば、力かなはで手を放てる、咄  
嗟に巡査は一躍して、棄つるが如く身を投ぜり。お  
香はハツと絶入りぬ。あはれ八田は警官として、社  
會より荷へる負債を消却せむがため、あくまで其死  
せむことを、寧ろ殺さむことを欲しつゝありし惡魔  
を救はむとて、氷點の冷、水凍る夜半に泳を知らざ  
る身の、生命とゝもに愛を棄てぬ。後日社會は一般  
に八田巡査を仁なりと稱せり。あゝ果して仁なりや、  
然も一人の渠が殘忍苛酷にして、恕すべき老車夫を  
懲罰し、憐むべき母と子を嚴責したりし盡瘁を、讚  
歎するもの無きはいかん。

【完】